実践研究は何をめざすか

日本語教育における実践研究の意味と可能性

武蔵野美術大学
三代純平

『実践研究は何をめざすか』目次

序　今なぜ実践研究なのか

第１部　理論編

１章　実践研究はどのように考えられてきたか

２章　新しいパラダイムとしての実践研究

３章　社会に埋め込まれた「私たち」の実践研究

４章　「実践の用語」と「理論の用語」

第２部　実践編

５章　介入する他者、つなぎ目としての多文化教育コーディネーター

６章　「イベント企画プロジェクト」の挑戦

７章　日本語学校におけるカリキュラム更新

８章　参加者の生活・人生にとって教室実践活動はどのような意味をもつのか

９章　結節点を結ぶ

１０章「生きることを考える」ための実践研究

実践研究とは何か

- 「実践」を「研究」すること？
- 「実践」を「研究」するための方法？

→　そもそも「研究」って何だろうか？

実践研究とは何か

プロジェクトワーク型の実践

「実践」の意味を理解したい

自分たちは何をしているのか。

やっていることにどのような意味があるのか。

どうすれば、もっとよくなるのか。

研究をしたい。

実践研究とは何か

実践を「研究」するための方法として

Action Research に注目

→Action Researchは

実践を研究するための方法ではない。

実践研究という新しいパラダイム

実践研究とは何か

研究の立場	研究方法	
実証主義	量的研究	統計
解釈主義	質的研究	エスノグラフィ、ライフストーリー
批判的		実践研究

実践研究の三つのキーワード

「批判的」（critical）：自らの実践が置かれている社会的状況，実践を形づけている「枠組み」を検証し，よりよいものへと再構成しようとする態度

「省察」（reflection）：「批判的」に実践について考察すること

「協働」（collaboration）：実践への参加者を実践研究に巻き込み，共に実践の改善へと向かうこと

批判的省察

社会的文脈：自分の教えている場所の意味は？

どうすれば、留学生の就職を支援したことになるのか？

一度、『　　』に入れてみる！

自分の教育観：日本語教育ってそもそも何なのか？

自分はどうしてそういう教育観をもっているのか？

協働

第一の協働：実践を共有している人

同僚、学習者など

第二の協働：実践研究という問題意識を共有している人

「なぜ協働か」：実践を改善していく行為＝実践研究

実践は一人では改善できない（難しい！）

実践研究とは

実践研究：実践への参加者たちが協働で批判的省察を行い，その実践を社会的により良いものにしていくための実践＝研究

実践研究の意義１ー「実践研究」という概念の意義

① 日本語教育実践を社会的文脈の中で問い直す。

② 日本語教育研究における実践研究の意味を再構築する。

③ 日本語教育の実践研究共同体を構築する。

実践研究の意義２ー「実践研究」を書く/読むことの意義

① FBがもらえる→さらなる「実践」の改善へ。

② 自分の実践を考えるための「リソース」となる。

③ 新しい実践研究へとつながる。

「リソース」としての実践研究

① 社会的文脈が描かれている。

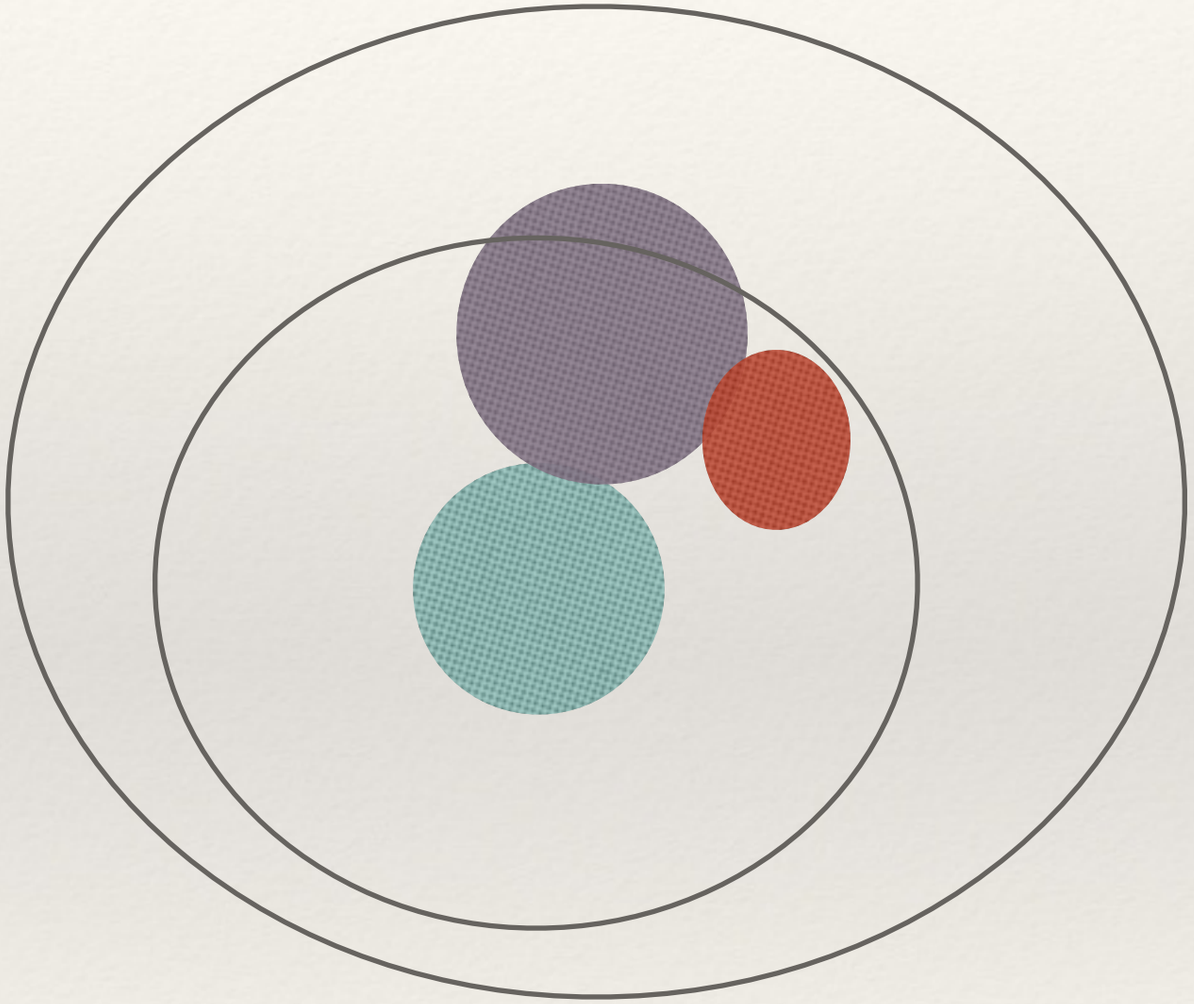
② 「私」の立場・感情、その変化の過程が描かれている。

→ 共有できる、共感できる。
比較できる、批判できる。

「日本語教育」の前提を絶対化しない。

「私」「私の実践」を脱文脈化しない。

新しい実践研究へ



実践研究者の協働が新しい実践研究へとつながる

具体例ーイベント企画プロジェクト

【本書第６章より】

問題意識：留学生の大学内の交流

改善：問題意識の共有　→　実践の共有へ

最後に一本書の意義と今後の展開

本書作成のプロセス

→　実践研究を実践/研究する「実践研究」

→　新しい実践研究/実践研究共同体の発展へ

→　言語文化教育研究学会の設立へ

実践研究共同体としての言語文化教育研究学会